

〈論文〉

『中山詩文集』の琉球漢詩 平仄式による検証と分析

王 尊 龍

はじめに

漢文や漢詩の形で表現される中国語の文語は、前近代における東アジアの共通言語とも言える。その中で漢文は、意思疎通の手段である筆談から国書や表文、謄文などの公文書の作成まで用いられ、外交行動の展開に重要な役割を果たした。一方で漢詩は、漢文と同じく知識人の教養でありつつも、「公」の性格の強い漢文とは異なり、個人的な抒情性を表出する文学形式として、より「私」の性格を帯びている。外交の舞台において、使節が外交の任務をうまく遂行するために、漢詩の唱和や贈答によって現地官僚との人間関係を円滑に築くことは、東アジアで非常に普遍的な現象である。

こうした性格を帯びている漢詩が近世の東アジアにおいて特に活躍したのは、外交の舞台であった。使節が外交の任務をうまく遂行するために、漢詩の唱和や贈答によって現地官僚との人間関係を円滑に築くことは、東アジアで非常に普遍的な現象である。十五世紀初頭に足利義満が明の建文帝に日本国王に冊封される際に、明からの冊封使と漢詩を唱和した絶海中津をはじめとする五山禅僧から、十九世紀末まで毎年二回以上北京に赴き、中国の官僚や知識人と漢詩交流を盛んに行った朝鮮燕行使まで、漢詩は教養の領域を超えて、実用性のある社交の媒介として用いられてきた。

ただ、社交の媒介として近世の東アジアにおける外交の場で十分な機能を発揮した漢詩と、日中の狭間で独自の外交活動を行っていた琉球王国との関係、あるいは琉球における漢詩の受容と、対中国外交に携わる通事たちの聚落である久米村における漢詩教育の展開に関しては、必ずしも明確にされていない。

近年、琉球王国の漢詩に関する新史料が相次いで刊行され、研究をとりまく条件が大きく改善したが、それに関する研究は決して多くはない。従来の研究は、琉球漢詩の内容や時代背景の解釈に偏向しており、漢詩を外交史や社会史研究の補充史料として扱う傾向があった。近体詩には基本的な規則として平仄が存在するのであるが、この形式的な側面に着目して琉球詩人の作詩水準を問うた研究は、管見の限りまだ見当たらない。

また、『中山詩文集』の成立背景としての琉球における漢学の学統と漢詩教育の展開について、従来の研究は琉球漢詩の発展の諸要因の説明を、中国・日本を含む東アジア地域的な政治文化環境に触れずに琉球内部の要因だけ求める傾向がある。

それゆえ、本稿は視点をかえて、まず第一章で近体詩の諸規則を簡単に説明して、第二章で琉球王国時代の最初の漢詩文集である『中山詩文集』に収録されている琉球詩人の漢詩作品を網羅し、平仄式の分析を行うことによって、当時の琉球漢詩は近体詩の形式や規則に則っているのかを検証しつつ、その特徴を明らかにする。次に第三章は、一七世紀から一八世紀前半にかけて、漢詩が中国文壇において占めていた重要性、および日中両国において流行していた詩風の変化を闡明し、さらに平仄式分析により得られた結果と照らし合わせて、当時の琉球を代表する首里と久米村という二つの漢学学統

の下で展開された漢詩教育の実態に迫ることを試みたい。

第一章 近体詩の規則

平仄式の検証は、異体字を解説する際にも、誤字・訛字を訂正する際にも、研究を進めるための足がかりを提供し、漢詩解読の有力な道具として有用である。

平仄式の検証に入る前に、本章では近体詩、すなわち格律詩創作の諸規則を簡潔に説明したい。しかし、平仄の規則はそれほど簡単なものではない。そして、日本の漢詩研究は、作品の内容や主題、または詩人の思想などを中心とする研究が多い一方で、平仄に関する問題がかなり敬遠されており、中国の古典文学である漢詩の複雑な構造と原理を日本語で説明する際の方法も統一されていない。平仄や漢詩の構造に関する研究は、近年、松尾善弘と古川末喜が優れた成果を出しており、本稿では松尾善弘氏の論考で取り上げられている平仄式検証のフォーマットを参考に、平仄の説明と検証を行う。

①基本平仄型

中国語には、声調という声の高低変化がある。平仄とは、中古漢語の平・上・去・入という四種の声調を持つすべての漢字を「平」と「仄」二類目に分けたものである。平は平声、仄は上・去・入声である。漢詩などの韻文学作品では、平声と仄声の漢字を規則的に配列することによって、リズムとしての美しさを生み出すのである。特に唐代に定着した近体詩では、このような音韻美を極めて重視し、押韻法を守るのみならず、一首や一句の字数、または平仄の並べ方も厳格に規定している。そして、上記のような規則の中で、

詩人が常に念頭に置いて考えなければならないのが、近体詩の四種の基本平仄型である。

なお、平仄基本形を説明する際に、いくつかの方法があるが、本稿は主に松尾善弘氏の図式化の方法を参考に行っている。

平声字を「○」、仄声字を「●」、印、平声韻を「◎」で図式化にすると、近体詩の基本平仄型は以下の通りである。(下線部は平仄変換可の字)

(A) 平起り平終り型	○ ○ ○ ● ◎	○ ○ ○ ● ◎	五言	七言
(B) 平起り仄終り型	○ ○ ○ ● ●	○ ○ ○ ● ●		
(C) 仄起り平終り型	● ● ● ◎	● ● ● ◎		
(D) 仄起り仄終り型	● ● ● ●	● ● ● ●		

すべての格律詩は、この四種の基本平仄型を基にして、押韻、反法、粘法などの規則に従った上で創作されなければならない。

②押韻

押韻とは、偶数句や初句が(A)、(C)の時、原則的に同じ韻部の平声字を句末の位置に繰り返し用い、響きを調和させることである。ただし、初句が(A)、(C)の場合は、必ずしも同じ韻部に限らず、隣の韻部の字を使って押韻することも許される。

近体詩の作詩は、韻書に定められた韻の分類、つまり韻部(あるいは韻目)に従って押韻する必要がある。一方で、六朝時代に編纂された『四声譜』を始め、体裁の整備や音韻の変化に伴い、実際に使用される韻書の系統も時代によって異なっている。程順則らが生

きた清朝にあたる時代に、公式化されたのは平水韻系統³⁾の韻書である。例えば、『詩韻集成』や『詩韻合璧』などがあり、いずれも清代知識人の常用書であると言える。

③平仄の調整（拗救）

実際に作詩する際に、四種の基本平仄型の配列に合致できない場合もある。このような基本平仄型に合わない詩句は、「拗句」と言う。しかし、「拗句」であっても、一定の規則に従って平仄を調整して、全体的な平仄数を基本平仄型と同じようにすれば、「救拯」することができる。ただし、平仄を救拯せず、自由に変換することができる特定のポジションもある。(2ページ「平仄変換可の字」に参照)つまり、「拗句」を「救拯」する規則、すなわち「拗救」の規則を守れば、基本平仄型と完全に一致しないとしても、近体詩としては合格と言える。

こういった「拗救」の方法は、主に以下の二種類である。

(1)同一句内自救

例えば、基本平仄型〔A〕「○○●●◎」を使用しなければならぬ場合、文意重視などの理由でやむを得ず一字目の「○」を「●」にしたなら、三字目の「●」を「○」にして、一字目の平仄調整と相殺することによって、全体的な平仄数は基本型と一致することができる。

(2)対句相殺

先の例と同様に、例えば、奇数句で基本平仄型〔D〕「●●○○○」を使用しなければならない場合で、やむをえず四字目の「○」を「●」にしたなら、対句である偶数句の第三字の「●」を「○」にして、奇数句四字目の平仄調整と相殺することによって、二句合わせて全体的

な平仄数は基本型と一致することができる。

④反法

反法とは、対句である奇数句と偶数句は反対の平仄式で配列しなければならぬ規則である。例えば、三句は「○○●●●◎」なら、四句は反対の「●●○○○●」にしなければならぬ。ただし、七言の場合、初句と二句両方とも押韻することが多いため、初句は「●●○○●●◎」なら、対句は「○○●●●◎」にしてもよい。

⑤粘法

粘法は、対句ではない奇数句と偶数句を、同じ平仄式で配列する規則である。具体的には、三句と二句、五句と四句、七句と六句を、同じ平仄式にすることである。ただし、五言であれば一、二、四字目は対応するが、三、五字目は対応しない。七言であれば一、二、三、四、六字目は対応するが、五、七字目は対応しない。こういった粘法は、「頭粘尾不粘」ともまとめられている。これを違反した詩句は、「失粘」と言う。

⑥孤平・孤仄

孤平と孤仄は、近体詩にとつては犯してはならない重大な禁忌である。平仄が「●○○」になった場合は孤平、「○○●」になった場合は孤仄、ということである。ただし、孤平の禁忌は、五言詩の平起り平終り型句〔A〕、ならびに七言の仄起り平終り型〔C〕にのみある。

⑦三平調・三仄尾(三平調・三仄調)

詩句の最後の三字が○○○、あるいは●●●になった場合は、三平調、三仄尾と言う。特に三平調は、孤平と同じく重大な禁忌である。

⑧对仗

律詩を作る際、対になる三句目と四句目、そして五句目と六句目は、それぞれの文字数、ならびに対応する単語の性質や品詞の種類などを同じにしなければならない。この規則を違反した詩句は「失対」と言う。絶句では、対仗は必須な条件ではない。

以上、近体詩を作る際に守らなければならない基本規則である。規則を守らない作品は「拗体」と言う。拗体は、近体詩としては失格の作品であり、清代では評価されないものである。

こういった規則に従って作詩することは、簡単とは言いがたく、特に中国語非母語話者である琉球人にとっては、一層困難であると推測される。しかし、当時の東アジア世界において、漢詩は文学でありながら、社交的な性質も持つものである。そのため、漢詩は対中国外交のみならず、対日外交においても、欠かせないものと考えられる。

次節からは、十八世紀初頭の琉球を代表する知識人が、漢詩という必要教養を如何ほどに掌握していたのかを明らかにするため、『中山詩文集』に収められた漢詩集を順に平仄式の点検を行っていきたい。

なお、本稿では、上里賢一により整理された『校訂本 中山詩文集』

(九州大学出版会、一九九八)を底本とする。

第二章 『中山詩文集』漢詩の平仄分析

「中山詩」

『中山詩文集』の冒頭に登場するのは、一六八三年の冊封使来航に関わる一連の漢文と漢詩作品である。おおむね冊封正使汪楫の父親の八〇歳の誕生日を祝う詩文、ならびに冊封副使林麟焜の母親の長寿を祈るものと林麟焜の徳行を讃頌する詩文によって構成されている。その中で、漢詩作品は「中山詩」を主題とした「題畫奉祝誥封翰林院檢討汪太公壽」と林麟焜に贈る「恭贈玉翁林先生詩」、「祝林母戴太夫人壽詩」があげられる。

これらの作品は主に、首里王府の役人によって作られたものである。それを『中山詩文集』の最初に押し出すのは、上里賢一によると、「編纂者の程順則は久米村の役人として、首里王府に花を持たせる意図が秘められていると見るべしだし、首里王府あつて久米村という地位と役割は厳然と自覚されている」という。また、このような構成にすることによって、『中山詩文集』が久米村だけの詩文集ではなく、琉球の詩文集であるという正統性を示すことも程順則の意図であつたと考えられている。

それらの作品は内容的にはほぼ同じと思われ、作品数も他の詩人ものより少ないため、一緒に見ていきたい。

次表は、初句の平仄型によって分類して作ったものである。

詩形	五言		七言		古風
	絶句	律詩	絶句	律詩	
初句平仄型					
〔平起り平終り型〕〔A〕	0	0	10	2	
〔平起り仄終り型〕〔B〕	1	0	1	0	
〔仄起り平終り型〕〔C〕	1	0	3	0	3
〔仄起り仄終り型〕〔D〕	3	3	2	0	
総計	5	3	16	2	29

(1) 初句仄起り仄終り型五言絶句作品例(三首中の二)

咏雙松(通家晩生尚純)

1 鬱鬱雙松樹	●●○○●●	〔平仄式〕	●●○○○○	〔基本平仄式〕
2 蒼蒼百歲姿	○○○○●●		○○○○●●	〔D〕
3 要知強與健	●●○○●●		○○○○●●	〔A〕
4 偏在歲寒時	○○○○●●		○○○○●●	〔B〕
	○○○○●●		○○○○●●	〔C〕

〈押韻・平仄の検証〉

詩型は五言絶句で、姿(津私切)、時(辰之切)が上平四支で押韻されている。

第1句、第2句は基本平仄型通りに作られている。

第3句一字目の「要」と三字目の「強」は、いずれにしても多音字であり、読み方によって、意味は言わずもがな、平仄や所属の韻部も異なる場合が多く存在している。「要」は伊消切○と於笑切●二種

の読み方があり、「強」は渠良切○、其兩切●、其亮切●三種の読み方がある。ここで、「要」は於笑切●、「強」は渠良切○と思われる。そのため、第3句の平仄式は「●○○●●」となり、一字目は平仄変換可のため特に救拯する必要がないが、作者は第4句の一字目の平仄も逆にして、対句相救の手を打っている。したがって、第3句、第4句は二句合わせて全詩の平仄数が基本型と見事に一致しているため、平仄上は完璧な作品だといえる。

(2) 初句平起り平終り型七言絶句作品例(十首中の二)

無題(邁闔理官毛知傳)

1 聲名蓋代是汪倫	○○○○●●	〔平仄式〕	○○○○●●	〔基本平仄式〕
2 無價文章動海濱	○○○○●●		○○○○●●	〔A〕
3 遙望江南秀色好	○○○○●●		○○○○●●	〔C〕
4 龍蔥古栢一堂春	○○○○●●		○○○○●●	〔D〕
	○○○○●●		○○○○●●	〔A〕

〈押韻・平仄の検証〉

本詩の詩型は七言絶句である。七言詩は、初句も押韻するのが主流である。それゆえ、七言詩作品では、初句〔A〕、〔C〕のほうが正格、初句〔D〕、〔B〕の方が偏格と言える。

濱(必鄰切)、春(樞倫切)が上平十一真で押韻している。

第1句、第2句、第4句はほぼ基本平仄型通りに作られていて、平仄上問題はないが、第3句の五、六、七字目は、全部仄声字を使用しているため、「三仄尾」(三仄調)になっている。

(3) 初句平起り平終り型七言律詩作品例(二首中の一)

祝林母戴太夫人壽(攝政王弟尚弘毅)

	〔平仄式〕	〔基本平仄式〕
1	上林鶯報兆芳辰	○●○●○●○●
2	暖日遲遲淑氣勻	●○●○●○●○
3	柳絮已跨詩句敏	●○●○●○●○
4	梅粧不減歲時新	○●○●○●○●
5	瑤池桃熟三千樹	○●○●○●○●
6	海島籌添九十春	○●○●○●○●
7	從此殊方長獻壽	○●○●○●○●
8	年年記祝太夫人	○●○●○●○●

〈押韻・平仄の検証〉

詩型は七言律詩で、辰(承真切)、勻(餘倫切)、新(斯鄰切)、春(樞倫切)、人(而鄰切)が共に上平十一真で押韻している。

第1句、第2句、第4句、第6句、第8句は基本平仄型通りである。第5句、第7句は平仄変換可のところに平仄型を逆にしたため、特に問題はない。

第3句の四字目は、第2句の四字目と異なる平仄を使用しているため、「失粘」の禁忌を犯している。

対仗について、第3句、第4句は柳絮・已跨と梅粧・不減、詩句・敏と歳時・新、第5句、第6句は瑤池と海島、桃熟と籌添、三千樹と九十春が対語となり、いずれにしても対仗の条件を満たしている。

従って本詩は、全体的な仕上がりが良いものの、失粘の禁忌を一回犯しているのが玉に瑕であるといえよう。

〈小結〉

『中山詩文集』の最初に収録されたこの二九首の漢詩では、平仄上の問題がある作品が五首ある。その中の四首はまとめて「恭贈玉翁林先生詩」の末尾に置かれている。また、これらの作品のほとんどは絶句である。というのは、首里の最初の学校「国学」が設立され、本格的に儒学と漢詩文の教育を展開したのは一七九八年である。これは冊封使汪楫らの来琉より一五年前のことである。周知のように、律詩は絶句より規則が多く、平仄の知識のみならず、対仗のために語彙の性質や品詞などの高い中国語の知識も要求されるため、創作の難易度が高いと言える。つまり、当時の首里の役人の作品に絶句が多いのは、専門的な漢学訓練を受けたことがない彼らは、それほど高い漢学の知識を持っていなかったためであると思われる。

曾益 「執圭堂詩稿」

曾益(砂辺親方)は、久米村曾氏の六世で、曾永泰、曾夔とも称する。彼は程順則と同じく勤学人として福州に留学した経験があり、その後外交の場で活躍した人物である。程順則の師である福州の碩儒・陳元輔が、曾益の個人詩集としての「執圭堂詩稿」のために跋文を書いた。その中で、陳元輔が、「曾益が、尤長於詩(特に詩文に優れている)」、「與余(中略)頗稱莫逆之交(私の親友とも言える)」と書いている。国王や王府役人の詩文の後に、曾益の「執圭堂詩稿」が久米士の作品として『中山詩文集』の冒頭に登場するの

は、程順則が久米村の先輩である曾益に対する尊敬を表しているほかに、恩師の親友、つまり中国における「輩分」思想の中に、自分より上の曾益を前面に押し出すことによって、中国式な倫理を唱えようとする意思もあったのではないだろうか。

次表は、「執圭堂詩稿」の漢詩を初句の平仄型によって分類したものである。なお、本詩集に収められている漢詩の作品数が比較的小さいため、その中の二首だけをあげる。

初句平仄型	詩形		古風
	五言	七言	
〔平起り平終り型〕〔A〕	絶句	律詩	0
〔平起り仄終り型〕〔B〕	0	3	
〔仄起り平終り型〕〔C〕	0	0	0
〔仄起り仄終り型〕〔D〕	0	4	
合計	0	9	14

(1) 初句仄起り仄終り型五言律詩作品例

西湖看梅

- | | | | |
|---------|--------|--------|-----|
| 1 曾夢江南好 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔D〕 |
| 2 探奇到虎丘 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔A〕 |
| 3 川原經萬劫 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔B〕 |
| 4 花鳥自千秋 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔C〕 |
| 5 過客知携酒 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔D〕 |

- | | | | |
|---------|--------|--------|-----|
| 6 看山竟浪遊 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔A〕 |
| 7 吳王歌舞後 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔B〕 |
| 8 回首使人愁 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔C〕 |

〔押韻・平仄の検証〕

詩型は五言律詩で、丘(驅尤切)、秋(此由切)、遊(于求切)、愁(鋤尤切)が共に下平十一尤で押韻している。

本詩の第1句一字目、第3句一字目、第8句一字目は基本平仄型と逆であるが、平仄変換可のため救拯していない。それ以外の詩句はすべて平仄基本型通りである。従って、本詩は平仄上の問題はな
いと思われる。

(2) 初句平起り平終り型七言律詩作品例(五首中の二)

己巳元旦搏臚禹慎齋先生招飲仙館時雨雪梅花盛開

- | | | | |
|-----------|--------|--------|-----|
| 1 新開正朔拜熙朝 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔A〕 |
| 2 猶喜名公折簡招 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔C〕 |
| 3 草閣相逢慚下榻 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔D〕 |
| 4 仙樓攜酒聽吹簫 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔A〕 |
| 5 寒梅堆徑香連屋 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔B〕 |
| 6 飛雪漫天白過橋 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔C〕 |
| 7 異地與君同是客 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔D〕 |
| 8 何妨潦倒共題蕉 | ○●○○○● | ○●○○○● | 〔A〕 |

〔押韻・平仄の検証〕

詩型は七言律詩で、朝(陟遙切)、招(之遙切)、簫(先彫切)、橋(祁堯切)、蕉(茲消切)が共に下平二蕭で押韻している。

第1句、第3句、第8句が平仄基本型通り作られている。

第2句一字目と第5句三字目は平仄変換可のため救拯していない。第4句五字目の「聽」は、他定切●と他経切○二種の発音があるが、実作する際に平仄両用字であると認められている。そのため、本句は「三平尾」の禁を犯していない。

第5句三字目と第6句一字目を基本平仄型と逆にしたことに対して、作者が第6句三字目も逆にして同一句内自救と対句相救を同時に実現しようとしたが、そのために第6句四字目の両側が全て仄声字になり、孤平の禁忌を犯してしまった。従って本詩も、少し瑕疵のある作品であると思われる。

蔡鐸「觀光堂遊草」

蔡鐸(志多伯親方)は、『歴代宝案』、『中山世譜』などの編纂を取り仕切り、近世久米村の形成に貢献した人物である。また蔡鐸は外交家としても活躍し、進貢使として数回渡清した。一六八八年の進貢の際に、彼の活躍によって、琉球の進貢人員が一五〇人から二〇〇人にまで増加され、進貢船の税金も免除された。その後、彼が総理唐采司(久米村総役)に選ばれ、二二年間勤めた。

さらに蔡鐸は文学者として、漢詩を堪能している。『中山詩文集』に収録されている蔡鐸の詩集は、彼が一六八八年、正義大夫として清朝に赴くときに作った「觀光堂遊草」である。詩集の序文と跋文は、曾益の「執圭堂詩稿」と同じく福州の碩儒陳元輔によって書か

れたものである。

次表は、初句の平仄型によって分類して作ったものである。

総計	詩形			
	五言		七言	
	絶句	律詩	絶句	律詩
〔平起り平終り型〕〔A〕	0	0	9	11
〔平起り仄終り型〕〔B〕	0	0	0	2
〔仄起り平終り型〕〔C〕	0	0	4	2
〔仄起り仄終り型〕〔D〕	0	2	0	0
古風	0			
30				

(1)初句仄起り仄終り型五言律詩作品例(二首中の二)

西湖看梅

〔平仄式〕

〔基本平仄式〕

1	梅有孤山骨	○●○○○●●	●○○○○●●
2	看來不改芳	○○○●●○○	○○○○○●●
3	自嫌三楚媚	●○○○○●●	○○○○○●●
4	豈作六朝香	●○○○○○○	●○○○○○○
5	月徑浮冰魄	●○○○○○○	●○○○○○○
6	霜天淡曉妝	○○○○○○○	○○○○○○○
7	橋邊桃柳色	○○○○○○●	○○○○○○●
8	零落怨蕭郎	○○●○○○○	●○○○○○○

〔押韻・平仄の検証〕

詩型は五言律詩で、芳(敷方切)、香(盧良切)、妝(側霜切)、郎(盧當切)が共に下平七陽で押韻している。

本詩の第1句一字目、第3句一字目、第8句一字目は基本平仄型と逆であるが、平仄変換可のため救拯していない。

第4句、第5句、第6句、第7句は基本平仄型通り作られている。

そして、第2句一字目の「看」は、もともと丘寒切○、祛幹切●二種類の読み方があるが、意味はほぼ変わらないため、作詩の際に平仄両用字と見なされている。それゆえ、第2句は基本平仄型通り作られていると考えてよい。従って、本詩は、平仄上完璧な作品だと思われる。

(2) 初句平起り平終り型七言絶句作品例(九首中の一)

元夕喜宿清湖舊館

		(平仄式)	(基本平仄式)
1	使臣一棹返衢州	●○○●●○○○	○○○ ●●○○○
2	依舊清湖半榻留	○●●○○○●○○○	●●● ○○○○ ●○○○
3	喜見星橋開鐵鎖	●●●○○○●●●○○○	●●● ○○○○ ●●○○○
4	分明城市有巖樓	○○○○○○●●●○○○	○○○○ ●●○○○ ●○○○
		○	(A)
		●	(D)

〔押韻・平仄の検証〕

詩型は七言律詩で、州(之由切)、留(力求切)、樓(盧侯切)、が共に下平七陽で押韻している。

第1句一字目と第2句一字目が基本平仄型と逆であるが、对句相救で救拯している。第3句目は基本平仄型通り作られている。

第4句の三字目は基本平仄型と比べて逆になっているため、六字目の平仄も逆にして同一句内自救で救拯している。しかし、それによって第3句、第4句の六字目が同じ平仄になったため、「反法」の違反をしている。

従って本詩は、少し瑕疵のある作品と思われる。

〔雪堂紀栄詩〕

「雪堂紀栄詩」は、久米村の役人たちが程順則に贈る「紀栄(栄誉を称賛する)」詩である。一六九三年、王太子の尚純が程順則の才能と功績を誉め立てるために、鳳尾蕉(ソテツ)を彼に賜った。その後、蔡鐸をはじめとする久米士が、程順則に詩を贈り、彼の栄誉を讃えた。その中には、蔡文溥、梁成楫、阮維新など、琉球が清朝に派遣した最初の官生たちの作品も登場している。

次表は、初句の平仄型によって分類して作ったものである。

総計	〔仄起り仄終り型〕〔D〕	0	〔仄起り平終り型〕〔C〕	0	〔平起り仄終り型〕〔B〕	0	〔平起り平終り型〕〔A〕	0	詩形	
									絶句	五言
									律詩	七言
									絶句	
									律詩	
					0					古風
17										

(1) 初句仄起り平終り型七言絶句作品例(四首中の一)

又七截四首其一（天章太學生都通事蔡文溥）

〈平仄式〉

〈基本平仄式〉

- | | | | | |
|---|---------|----------|----------|------|
| 1 | 鐵木錚錚獨耐冬 | ●●○○●●●○ | ●●○○●●●○ | ○(C) |
| 2 | 青枝依舊帶春容 | ○○●●●●○○ | ○○●●●●○○ | ○(A) |
| 3 | 看來似在波濤里 | ○○●●○○●● | ○○●●○○●● | ○(B) |
| 4 | 彷彿鱗生欲化龍 | ●●○○○○●● | ●●○○○○●● | ○(C) |

〈押韻・平仄の検証〉

詩型は七言絶句で、冬（都宗切）、容（餘封切）、龍（盧容切）が共に上平二冬で押韻している

本詩の平仄式は、基本平仄型と完全に一致している。平仄上に完璧な作品だと思われる。

(2) 初句仄起り平終り型七言律詩作品例（三首中の一）

紀榮詩（得刻太學生都通事梁成楫）

〈平仄式〉

〈基本平仄式〉

- | | | | | |
|---|---------|----------|----------|------|
| 1 | 鐵木由來天上枝 | ●●○○○○●● | ●●○○○○●● | ○(C) |
| 2 | 恩深偏為近臣移 | ○○○○●●●○ | ○○○○●●●○ | ○(A) |
| 3 | 酬功不待膺封日 | ○○●●○○●● | ○○●●○○●● | ○(B) |
| 4 | 樹德尤宜未老時 | ●●○○○○●● | ●●○○○○●● | ○(C) |
| 5 | 鳳尾翩翩張夜月 | ○○○○●●●○ | ○○○○●●●○ | ○(D) |
| 6 | 龍鱗點點映朝曦 | ○○●●●●○○ | ○○●●●●○○ | ○(A) |
| 7 | 雪堂今日新承寵 | ○○○○●●○○ | ○○○○●●○○ | ○(B) |
| 8 | 紀勝原須共賦詩 | ●●○○○○●● | ●●○○○○●● | ○(C) |

〈押韻・平仄の検証〉

詩型は七言律詩で、枝（巨而切）、移（延知切）、時（辰之切）、曦（盧宜切）、詩（申之切）が共に上平四支で押韻している。

第3句、第4句、第5句、第6句、第8句は基本平仄型通りに作られている。第1句五字目は基本平仄型と逆になっているため軽い孤仄となったが、一般的に拗句と見なされない。第2句三字目は平仄変換可のため、救拯していない。第7句一字目と三字目は同一句内自救で救拯している。

程順則「雪堂燕遊草」

程順則（名護親方）は、近世琉球の代表的な政治家・知識人である。久米士である程順則は、中国へ五回渡り、福州や北京で中国の知識人と広く交流した。そして、彼が琉球の教育事業にも貢献した。一七〇六年の進貢の際には、程順則が自費で教科書として民間で普及していた『六論衍義』と彼自ら著した渡清するときの指南書である『広義指南』を版刻して琉球にもたらした。

『中山詩文集』に収められている個人詩集の中、程順則の「雪堂燕遊草」は作品数が最も多いものである。「雪堂燕遊草」は、一六九六年彼が進貢北京大通事として北京に赴いてから帰国するまでの間に作った漢詩をまとめたものである。

次表は、初句の平仄型によって分類して作ったものである。

詩形	初句平仄型			
	〔平起り平終り型〕〔A〕	〔平起り仄終り型〕〔B〕	〔仄起り平終り型〕〔C〕	〔仄起り仄終り型〕〔D〕
五言	絶句	律詩		
七言	絶句	律詩		
古風	1			
総計	6	7	40	31
	2	6	1	0
	0	0	17	14
	1	1	0	17
	3	0	21	17
	1			
	85			

(1)初句平起り平終り型七言律詩作品例(一七首中の二)

晚泊淮陰感賦

1	淮陰客艇系江乾	○	○	○	○	○	○	〔A〕
2	此地曾經隱鳳鸞	●	●	○	○	○	○	〔C〕
3	跨下吞聲山色改	●	○	○	○	○	○	〔D〕
4	城邊垂釣水流殘	○	○	○	○	○	○	〔A〕
5	霸王項羽空求將	○	○	○	○	○	○	〔B〕
6	丞相蕭何議築壇	○	○	○	○	○	○	〔C〕
7	莫恨淒涼長樂夜	●	○	○	○	○	○	〔D〕
8	千秋知己淚難乾	○	○	○	○	○	○	〔A〕

〔押韻・平仄の検証〕

詩型は七言律詩で、乾(居寒切)、鸞(盧官切)、殘(財干切)、壇(渠焉切)、乾(居寒切)が共に上平十四寒で押韻している。

第1句、第2句、第3句、第7句は平仄基本型通り作られている。第4句、第8句の三字目は基本平仄型と逆であるが、平仄変換可のため、救拯していない。第5句、第6句の一字目は、基本平仄型に比べると、それぞれ逆になっており、対句相救で救拯している。本詩は、全体的な仕上がりがよく、平仄上は完璧な作品だと思われる。

(2)初句仄起り平終り型七言律詩作品例(二四首中の二)

蕪城懷古(二首)其一

1	隋帝豪華蔓草中	○	○	○	○	○	○	〔C〕
2	蕭條二十四橋風	○	○	○	○	○	○	〔A〕
3	鴉翻廢苑香雲散	○	○	○	○	○	○	〔B〕
4	龍去長江錦水空	○	○	○	○	○	○	〔C〕
5	祇有山川留勝蹟	○	○	○	○	○	○	〔D〕
6	更無父老說行宮	○	○	○	○	○	○	〔A〕
7	瓊花冷落蛾眉老	○	○	○	○	○	○	〔B〕
8	愁見蕪城夕照紅	○	○	○	○	○	○	〔C〕

〔押韻・平仄の検証〕

詩型は七言律詩で、中(陟隆切)、風(方中切)、空(枯公切)、宮(居中切)、紅(胡公切)が共に上平一東で押韻している。

第2句、第3句、第5句、第7句は基本平仄型通りに作られている。第1句、第4句、第6句、第8句の一字目は基本平仄型と逆で

あるが、平仄変換可のため、救拯していない。

本詩は懷古詩として、全体的な仕上がりがよく、対仗も非常にきれいな対語を使用している。そのため平仄上のみならず、美学上でも素晴らしい作品だと思われる。

(3) 初句平起仄終り型五言排律作品

渡黄河

1	黄河秋色滿	○	○	○	○	●	○	○	○	○	●	(B)
2	喜是大清時	●	●	●	○	○	●	●	●	○	○	(C)
3	源自崑崙出	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(D)
4	山從砥柱支	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(A)
5	溱洄斜塞厲	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(B)
6	奔放走雲螭	●	●	●	○	○	●	●	●	○	○	(C)
7	九里看新潤	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(D)
8	三門溯舊基	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(A)
9	朝宗歸海疾	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(B)
10	鼓浪到天奇	●	●	●	○	○	●	●	●	○	○	(C)
11	舟楫空中度	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(D)
12	星辰水面移	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(A)
13	廻瀾衝柁急	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(B)
14	落葉帶烟披	●	●	●	○	○	●	●	●	○	○	(C)
15	大勢吞秦障	●	●	●	○	○	●	●	●	○	○	(D)
16	豐功勒禹碑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(A)

17	東溟思獻雉	○	○	○	○	●	○	○	○	○	●	(B)
18	涉此敢云疲	●	●	●	○	○	●	●	●	○	○	(C)

〔押韻・平仄の検証〕

本詩の詩型は五言排律(長律)である。排律も近体詩の一種であり、全文の長さに対する制限がないが、普通の律詩と同じ押韻と平仄の規則を守らなければならない。その上、首聯と尾聯を除くすべての聯の対仗も要求される。さらに排律は、句数が多いものの、途中に韻を変えてはいけないため、他の律詩より創作の難易度が高く、詩人の腕前を示すのにふさわしい詩型であると言えよう。

時(辰之切)、支(旨而切)、螭(抽知切)、基(居之切)、奇(渠宜切)移(延知切)、披(攀麋切)、碑(逋眉切)、疲(蒲麋切)が共に上平四支で押韻している。

第3句、第11句の一字目は基本平仄型と逆であるが、平仄変換可のため、救拯していない。それ以外の詩句はすべて平仄基本型通りである。本詩は排律の諸規則を全部満たした上で、荒れ狂っている秋の黄河の激浪、及びそれを渡ろうとする作者が持つ高邁な志を描き出した素晴らしい作品と思われる。

程順則「雪堂雜組」

「雪堂雜組」は一六九六年に成立した程順則の個人詩集である。中に程順則の代表作と思われる「中山東苑八景」という琉球における東海朝曦、西嶼流霞、南郊麥浪、北峯積翠、石洞獅躡、雲亭龍涎、松徑濤聲、仁堂月色の八か所の景色を詠じる漢詩が収録されている。次表は、初句の平仄型によって分類して作ったものである。

『中山詩文集』の琉球漢詩 平仄式による検証と分析

総計	[仄起り仄終り型][D]	[仄起り平終り型][C]	[平起り仄終り型][B]	[平起り平終り型][A]	詩形	
					絶句	五言
0	0	0	0	0	絶句	七言
3	2	0	1	0	律詩	
9	0	4	0	5	絶句	七言
16	0	5	0	10	律詩	
1					古風	
28						

(1) 初句仄起り仄終り型五言律詩作品例(二首中の一)

寄懷鴻臚蕭子貽先生

1	客路同來遠	●	○	○	○	○	●	○	○	○	○	〔D〕
2	賢勞北至南	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔A〕
3	月卿新使節	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔B〕
4	天闕舊朝簪	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔C〕
5	纔獻談心酒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔D〕
6	難留復命驂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔A〕
7	抵今滄海外	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔B〕
8	極目更何堪	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔C〕

〔平仄式〕

〔基本平仄式〕

〔押韻・平仄の検証〕

詩型は五言律詩で、南(那含切)、簪(緇深切)、驂(倉含切)、堪(苦含切)が共に下平十三覃で押韻している。

(2) 初句平起り平終り型七言律詩作品例(十首中の一)

寄懷郡司訓戴叔子先生

1	曾傳註禮舊家聲	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔A〕
2	此日春風泮水清	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔C〕
3	皋比十年存古道	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔D〕
4	蠻箋五月寫離情	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔A〕
5	東溟烟散扶桑曉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔B〕
6	南國雲開苜蓿晴	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔C〕
7	兩地相思不相見	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔D〕
8	祇餘明月上高城	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〔A〕

〔平仄式〕

〔基本平仄式〕

〔押韻・平仄の検証〕

詩型は七言律詩で、聲(書征切)、清(親盈切)、情(慈盈切)、晴(慈盈切)、城(時征切)が共に下平八庚で押韻している。

第1句、第2句、第4句が基本平仄型通りに作られている。第5句三字目、第6句一字目は平仄変換可のため救拯していない。第8句の一字目と三字目は基本平仄型と比べると、それぞれ逆にしてあり、同一句内自救で救拯している。第3句も恐らく、第8句と同じ

ように一字目と三字目を逆にして同一句内自救で救拯しようとしている。しかし、二字目の「比」は多音字であり(補委切●、蒲麩切○など)、「皋比」の場合は後者の「蒲麩切○」となるため、2句の二字目と異なる平仄を使用することになり、失粘の禁忌を犯している。第7句五、六字目もお互いに逆にして同一句内自救で救拯している。そのため最後の三文字が「●○○」になったが、七言詩の場合、孤平が平仄基本型「C」のみにおいては成立するため、本句は孤平の禁忌を犯していない。

本詩はおそらく、平仄より内容のほう、特に対仗を重視しているため、何度も救拯の手を打っていたが、結局平仄上の禁を犯してしまった。従って、本詩も少し瑕疵のある作品と思われる。

程搏萬「焚餘稿」

程搏萬は、程順則の次男である。「中山詩文集」に収録されたのは、一四歳の若さで亡くなった彼が、一一歳から一四歳までにつくった作品である。

次表は、初句の平仄型によって分類して作ったものである。なお、本詩集に収められている漢詩の数が比較的少ないため、その中の一首だけを挙げる。

詩形	初句平仄型			
	〔平起り平終り型〕〔A〕	〔平起り仄終り型〕〔B〕	〔仄起り平終り型〕〔C〕	〔仄起り仄終り型〕〔D〕
絶句	0	0	0	0
律詩	1	0	0	0
絶句	3	0	0	0
律詩	1	0	0	0
古風	0			
合計	5	0	0	0

(1)初句仄起り仄終り型五言律詩作品例

題水竹居(十四歳作)

詩形	〔平仄式〕			
五言	〔A〕	〔B〕	〔C〕	〔D〕
絶句	●●●●●	●●●●●	●●●●●	●●●●●
律詩	●●●●○	●●●●○	●●●●○	●●●●○
絶句	●●●●○	●●●●○	●●●●○	●●●●○
律詩	●●●●○	●●●●○	●●●●○	●●●●○
古風	0			
合計	5	0	0	0

〈押韻・平仄の検証〉

詩型は五言律詩で、堂(徒郎切)、涼(呂張切)、蒼(千剛切)、觴(戸羊切)が共に下平七陽で押韻している。

第1句三字目、第5句一字目が平仄変換可のため救拯していない。第2句、第3句、第4句、第8句がすべて基本平仄型通り作られている。第6句の一字目は基本平仄型と比べて逆になっているため、三字目の平仄も逆にして同一句内自救で救拯している。第7句最後の三文字はすべて仄声字を使用しているため、「三仄尾」の禁忌を犯してしまっている。

周新命「翠雲樓詩箋」

周新命(目取真親雲上)は、程順則と同じく若い頃「讀書習礼」のために勤学人として福州に渡り、福州の儒者竺天植の元で詩を学んだ。彼が帰国した後、一七〇七年には王世孫尚益に四書、詩経の進講をしており、尚益の即位後も続けられた。一七〇一年(康熙四〇)三六歳で都通事、一七一〇年には中議大夫、一七一一年には再度久米村講解師に登用され、一七一三年、四八歳で正議大夫になった。⁽⁸⁾ 次表は、初句の平仄型によって分類して作成したものである。

初句平仄型	詩形			
	五言		七言	
(平起り平終り型)(A)	絶句	律詩	絶句	律詩
(平起り仄終り型)(B)	0	2	0	5
(仄起り平終り型)(C)	0	0	8	0
(仄起り仄終り型)(D)	0	1	0	0
合計	0	3	13	16
古風				0
合計				32

(1)初句仄起り仄終り型五言律詩作品例

寄程寵文

1 與子握手別	●●●●●	●●●●●	(D)
2 愁心繞故鄉	○●●●●	○●●●●	(A)
3 驛亭花徑冷	●●●●●	○●●●●	(B)
4 江路草橋荒	○●●●●	○●●●●	(C)
5 客夢隨山月	●●●●●	○●●●●	(D)
6 溪聲落雪堂	○●●●●	○●●●●	(A)
7 故人如問我	○●●●●	○●●●●	(B)
8 萬里一空囊	●●●●●	○●●●●	(C)

〈押韻・平仄の検証〉

詩型は五言律詩で、郷(虚良切)、荒(呼光切)、堂(徒郎切)、囊(奴當切)が共に下平七陽で押韻している。

第3句、第4句、第7句の一字目は平仄変換可のため救拯していない。他の詩句がすべて基本平仄型通り作られているが、初句が仄字四つを使用しているため、「三仄尾」の禁忌を犯してしまった。

(2)初句平起り平終り型七言絶句作品例(五首中の二)

聞鐘

1 一池月色映千峰	○●●●●	○●●●●	(A)
2 貝葉風翻古寺中	○●●●●	○●●●●	(C)

- 3 夜靜涼生秋正好 ○●○○○●●●●●○○○○○●●●●●(D)
- 4 不堪雲外數聲鐘 ○○○●●●○○○●○○○○○○○○(A)

〈押韻・平仄の検証〉

詩型は七言絶句で、第2句、第3句の一字目が、それぞれ基本平仄型と比べると、それぞれ逆になっているが、平仄変換可のため救拯していない。それ以外の詩句は、基本平仄型通りである。

本詩の押韻について、峰(敷容切)、鐘(諸容切)が上平二冬で押韻しているが、「中(陟隆切)」は上平一東という違う韻部の字であるため、押韻上のミスを犯してしまった。ところが、平水韻系統で異なる韻部に属している「中」と「鐘」が、現代中国語(標準語)では同じ発音(zhong)を持っている漢字であり、『洪武正韻』にも同じ発音であると記されている。そのため、おそらく幼い頃から官話を学び育った周新命ら久米村役人も、「中」と「鐘」を同じ発音で読んでいるだろう。従って、このような押韻錯誤は、まさに中国語上達者しかできないミスとも言えるだろう。

〈小結〉

『中山詩文集』は、琉球で最初に編纂された漢詩文集であり、琉球の漢詩と漢文の特徴を把握する上では最も基礎になるものと言われている⁹⁾。本稿では、『中山詩文集』に収録された琉球漢詩の平仄式の分析に焦点を当て、その時代の琉球王国を代表する詩人の作詩水準を検証してみた。

次表は、『中山詩文集』に収録されたすべての琉球漢詩の初句の平仄型によって分類して作ったものである。

初句平仄型	詩形	
	絶句	律詩
〔平起り平終り型〕〔A〕	3	2
〔平起り仄終り型〕〔B〕	2	5
〔仄起り平終り型〕〔C〕	2	44
〔仄起り仄終り型〕〔D〕	9	2
合計	16	107
合計	19	99
古風		4
合計		245

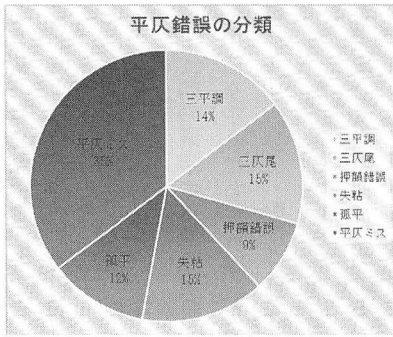
表①

そして、各詩集に収録されている漢詩の数、並びに平仄錯誤がある漢詩の数と比率は次表に示す通りである。

詩集	漢詩首数	錯誤首数	比率
首里役人「中山詩」	29	5	17%
曾益「執圭堂詩稿」	14	3	21%
蔡鐸「觀光堂遊草」	30	3	10%
久米村役人「雪堂紀栄詩」	17	1	6%
程順則「雪堂燕遊草」	85	7	8%
程搏萬「焚餘稿」	28	5	18%
程順則「雪堂雜組」	10	3	30%
周新命「翠雲樓詩箋」	32	5	16%
合計	245	34	14%

表②

それによって得られた知見を以下に示す。
『中山詩文集』に収められている漢詩が成立した一七世紀末に生



図①

きた琉球王国を代表する知識人たちが作った漢詩は、平仄上のミスが多少存在しているが、その大部分が近体詩の作詩規則に則って作られたものである。

また、近体詩の平仄式には正格と偏格が存在している。五言詩では〔平起り仄終り型〕〔A〕と〔仄起り平終り型〕〔C〕が偏格。七言詩の正格と偏格は五言詩に反する。それについて表①を見れば明確なように、『中山詩文集』の漢詩には、正格の数が極めて多い。

特に程順則をはじめとする久米村役人の漢詩集には、首里漢詩と違い、絶句より作詩難易度が高い律詩の数が多く、平仄の規則のみならず、対仗も対句の規則に従った上で作品がつくられており、詩形と詩意ともに優れている作品が多数ある。

そして、作詩風格の差異を除いて、『中山詩文集』に収録されている漢詩の平仄を検証した結果から見れば、久米村出身者と首里士が犯した平仄錯誤の種類も、相当異なっていると考えられる。

前述の詩形の選択（絶句と律詩）のみならず、次図は『中山詩文集』に収められている平仄上に瑕疵がある漢詩の主な錯誤を分類したものである。

その中で、特に三平調と三仄尾は、古体詩の一つ重要な特徴であるため、近体詩を作る際には避けなければならないミスで

あると言われている。ところが、久米村出身者が犯したのは主に細かい平仄ミスであるのに対して、詩の数が全詩集のおよそ一割程度しかない首里漢詩は、半数以上が三平調・三仄尾の錯誤を犯してしまった。その差異は、首里と久米村の異なる学統から生まれたものに他ならないのではないだろうか。

第三章 琉球漢学の学統と漢詩教育の展開

琉球における漢学の展開には二つの系統があるといわれる、上里賢一は「琉球の漢学の成立と展開には、二つの系統がある。日本から渡来した僧侶や日本に留学した琉球僧らによって伝えられた主に山門を中心にして展開したものと、『閩人三十六姓』とよばれる中国福建省等から来た人たちが定住して形成した久米村（唐榮）の人たちが伝えたものである」と指摘している¹⁰。

しかし、上里が述べたこの二つの漢学学統がそれぞれの程度に琉球王国の教育事業に浸透したのか、そしてその中でも、各学統における漢詩の重要性、および漢詩教育の実態について、従来必ずしも明確化できていなかった。

また、従来の研究では、『中山詩文集』の刊行を一つの時代の区切りにして琉球漢学・漢詩およびその教育の展開を論じられてきたが、それ以前の時代、つまり中国の明朝に当たる時代において、なぜ琉球詩人の漢詩集がひとつも残っていないのか、という問題はほとんど取り上げられておらず、未解明のままとなっている。

そこで本章は、一七世紀から『中山詩文集』が刊行された一八世紀前半にかけて、漢詩が中国文壇において占めていた重要性、および日中両国における流行詩風の変化を闡明し、さらに平仄式分析に

より得られた結果と照らし合わせ、当時の琉球を代表する首里と久米という二つの漢学学統の下で展開された漢詩教育の実態を明らかにすることを課題とする。

(1) 山門の漢学と首里の漢詩

山門を中心にして展開した漢学の代表的な人物は、「万国津梁の鐘」と呼ばれる、かつて首里城正殿で飾られていた鐘の銘文の作者であった溪隱という京都五山の僧侶、および漢文訓読法の「文之点」を完成させた南浦文之の弟子である泊如竹がいた。こうした僧門の漢学が、王府を中心に首里の士族階層で展開されていたと言われている。

薩摩の琉球侵攻より以前、まだ明朝の冊封国としての琉球であった時代における、僧門による漢学・漢詩教育の展開については、一六〇六年（万曆三十四年）に尚寧王の冊封使として琉球へ赴いた夏子陽が著した『使琉球録』において、次のように記されている。

「僧識番字、亦識孔氏書。以其少時嘗往倭國習於倭僧、陪臣子弟十三、四歲皆從之習字讀書。如三十六姓者、復從舊時通事習華語、以儲他日長史、通事之用」

上記より、首里士族の教育は主に日本に留学した経験がある僧侶が担任していたのに対して、久米村での教育は、通事育成の目的で独自に行われていたことがわかる。

そして夏子陽は、十五世紀初頭に通事として太監・鄭和の南海遠征に参加した費信が書いた旅行記である『星槎勝覽』に記されている琉球人の作詩能力に対する評価、すなわち

「作詩效唐體」

を引用した上で、次のように反論している。

「作詩、惟僧能之、然亦曉音韻、弄文墨已爾、許以『效唐』、則過也」

つまり、夏子陽は当時の琉球において、作詩するのは僧侶のみで、その水準も低いことを批判しており、「唐体」に倣っていないという評を残している。

琉球人の作詩水準を批判した明の冊封使は、夏子陽だけではなく、彼よりも以前に琉球に赴いた陳侃、郭汝霖、蕭崇業も、先述の「效唐体」という点について、琉球人が作った漢詩を否定した。したがって、後代の冊封使が陳侃ら先人の意見に附和雷同して、類似した意見を記した可能性があるものの、「唐体」であるか否かを基準にして、漢詩の優劣を判断することは、夏子陽ら冊封使をはじめとする明朝知識人の一般的な認識であったことが確認できるだろう。

明の時代には、李攀龍と王世貞を筆頭とする「古文辞派」が当時の文壇を主宰した。彼らは「文の前漢より、詩の天宝より下、俱に観るに足るものなし」、「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」などを主張し、盛唐詩を漢詩創作上の絶対的な規範として定めた。こうした「古文辞派」の盛唐詩に対する極端な擬古主義は、当時の漢詩創作や鑑賞に多大な影響を与えた。それはまた、明代の冊封使が「唐体」に執着している直接の要因であると考えられる。

「古文辞派」が提唱した擬古主義の文学運動は、中国だけではなく日本の文壇にも影響を与えた。一八世紀の日本における徂徠学の流行に伴い、荻生徂徠とその門人が唱えた擬古主義の詩文創作が日本の漢詩壇を席捲することになるのである。徂徠の門人が著した『護

園雜話』には、徂徠が古文辞の理論を受容する契機について、以下のように記している。

「尤其購れたるは徂翁三十九か四十歳の時の由、子迪が物語なり。それ故徂翁殊に書に富まれたり。其中に李王が集もありて、古文辞を修せられしことそれよりなりとぞ」

すなわち、荻生徂徠は、四十歳の時に明の李攀龍と王世貞の著作を得て、そこから「古文辞派」の思想を受容したのである。

しかし、日本全国で徂徠学が流行し始めるのは十八世紀の江戸中期であり、陳侃や夏子陽らが来琉する十六世紀中葉と十七世紀初頭に、日本に留学して詩を学んだ琉球の僧侶たちは、おそらく「古文辞派」が奉唱する盛唐詩の風格とかなり異なる詩風を有する漢詩を作っていたと考えられる。

そのため、彼らの作品には「音韻を知る」という点は認められるが、「效唐体」という最も重要な基準は満たされなかった。このような日本と中国における流行詩風のズレが、明にあたる時代の琉球漢詩が夏子陽ら冊封使に評価されなかった一つの要因であると考えられる。

さて、こうした山門の漢学教育を受けていた当時の首里士族の作詩は、如何なる水準に達していたのだろうか。現在、明代に当たる時代における琉球僧侶や首里士族の漢詩集は残っていない。しかし、当時の全貌を把握するには明らかに不足しているもの、個別の作品は僅かながら散見される。それらから当時の首里役人の作詩水準を管窺していきたい。本稿で取り上げるのは、首里出身の馬成驥が六一一年に作詩した七言律詩である。この詩は、作詩された同年に朝鮮燕行使の李暉光が明に赴いた際の記録『琉球使臣贈答録』

に収録されている。

肅勤申臚朝鮮台使 馬成驥(16)
(向氏東風平親方朝香)

〈平仄式〉 〈基本平仄式〉

1	堯天舜日照遐方	○○○○●●○○	○○○○●●○○○	(A)
2	航海梯山來帝邦	○○●●○○○○	○○○○●●○○○	(C)
3	不期而會天下國	○○○○●●○○	○○○○●●○○○	(D)
4	凡有血氣悉稱降	○○●●○○○○	○○○○●●○○○	(A)
5	邂逅相遇雖萍水	○○○○●●○○	○○○○●●○○○	(B)
6	前緣夙定非偶然	○○○○●●○○	○○○○●●○○○	(C)
7	喜承晤教故所願	○○○○●●○○	○○○○●●○○○	(D)
8	俛爾東南兩分還	○○○○●●○○	○○○○●●○○○	(A)

馬成驥は、後に向鴻基東風平親方朝香と改称した首里士である。彼のこの作品は、言語が通じない朝鮮使節と意思疎通をしながら、自分の感懐を述べるものとして十分に役割を果たしたが、基本平仄式と照合すると明白なように、第1句、第2句以外は平仄上の間違いが多く、後る四句の韻が、前四句の上平三江から下平一先へ変わって、頷聯と頸聯の第3句、第4句、第5句、第6句も対仗していない。改めて全体を見ると、律詩というより、二つの絶句が組み合わさったものに近いと思われる。よって、作品は、「唐体」の基準をも満たしていないと判断できよう。

(2) 久米村の漢学と漢詩

一方で、对中国外交における職掌を専任していた久米士の漢学は

これと対照的な状況を呈していた。周知のように、外交人材を養成するための教育システムが存在しており、そのシステムは、主に公的な教育機関で行う学校教育と勤学生・官生派遣の形式で実施される留学教育によって構成されていた。久米村の子弟は、通事として対中朝貢での活躍が期待されていたため、彼らは、まず天妃宮で句読・官話など基礎知識を学び、次に明倫堂で奏文、語文などの実用漢文知識と儒学、漢詩文などの漢学教養を身につけ、最後に官生や勤学生として中国に留学するという理想的な進学ルートがあった。また、この教育システムを支える教員と、教育を受ける学生は、ほぼ久米村出身者だけに限定されている。

しかし、こういった理想的な漢学教育体系は、程順則らの時代にはまだ形成されていないかった。明倫堂は、一七七八年に程順則の提案によって創建されたものである。天妃宮で初等教育を行うことも、明倫堂創建後のことである。

程順則らは、彼らの自宅での「学齋」によって漢学の知識を学習した。そして、この「学齋」で講義をしていた大多数が官生出身者であった。¹⁶⁾しかし、おそらく程順則の世代の久米士たちに、講義をする官生出身者の教師はいなかったと思われる。なぜなら、琉球の官生派遣は、一五七九年明朝に三名の官生を派遣したから、一六七一年に清朝へ蔡文溥らを送り官生派遣を再開するまで、島津氏の琉球侵攻ならびに中国の明清交替の動乱により九二年中断していたためである。加えて、15世紀後半に、琉球による中継貿易が急激に衰退することによって、久米村の勢力と地位は底辺に落ち込み、衰退の一途をたどっていた。

一六〇六年に来琉した冊封使夏子陽の『使琉球録』には、当時久

米村の衰勢について

「余聞諸琉球昔遣陪臣之子進監者、率皆三十六姓；今諸姓凋謝、僅存蔡、鄭、林、程、梁、金六家而族不甚蕃、故進監之舉、近亦寥寥。大夫、長史、昔以誦詩學禮者充之、故多彬彬禮讓；今僅取奔走濫觴匪人、則末流漸失矣。三十六姓者、昔所居地曰營中。今強半邱墟、過之殊可概焉¹⁷⁾。」

と記されている。

こうした衰退に伴い、採用された役人が「小まめに働く者」しか残っていない久米村では、漢学をはじめとする文教事業も相当没落していただろう。

ところが、久米村における学問の衰退は、夏子陽が来琉した一六〇六年よりも更に以前、つまりは約七十年も以前に、すでに始まったと考えられる。日本の僧侶である月舟寿桂が一五三〇年ごろに書いたと推定された『幻雲文集』に収められている「鶴翁字名並序」において日本に渡来した琉球僧の鶴翁智仙が当時の久米村の学問について以下のように語っている。

「有一聚落、曰久米村、昔大唐人百餘輩、來居此地而成村、頗有文字、子孫相繼而學、令彼有文者製隣國往還之書。近來無為學者、或赴大唐而入小(大か)學、但淺陋不足取焉¹⁸⁾。」

すなわち、少なくとも鶴翁智仙が日本に留学する前の十六世紀初頭において、中国に派遣された官生を含む久米士族の文教事業はすでに評価されなくなっていた。おそらく当時の久米村においては、官話や文書作成などの実用知識のほか、高度な漢学教養が必要とされる漢詩教育を行う能力のある人材は存在していなかったのだらう。

『明会典』をひもとけば、明代の科挙科目に関する記載には、漢詩の問題が見当たらない。そして、琉球官生が留学していた明代の国子監でも、漢詩に関する講習や定期試験は行われていない。

そこで、久米村の衰退と官生派遣の断絶が起きる以前は、琉球漢学の一系統である久米村の漢学においては、漢詩の教育が重視されていなかった、ということ指摘しなければならない。

ここではさきにふれた『琉球使臣贈答録』に収録されているもう一首の琉球漢詩を取り上げたい。作者は当時の久米村総役で、紫金大夫の蔡堅である。

奉酬贐敬朝鮮台使 蔡堅

1	海外觀面是奇逢	●●●●○○○	●●○○○◎(C)
2	詎知一見即包容	●○○●○○○	○○●○○(A)
3	皇恩浩蕩均霑被	○○○●○○●	○○●○○(B)
4	珠玉淋漓我獨深	○○○●○○●	○○●○○(C)
5	長才偉略靡雙匹	○○○●○○●	○○●○○(D)
6	幹國謀王第一人	●●●○○○○	○○●○○(A)
7	予心感佩真忘寐	○○○●○○○	○○●○○(B)
8	崑俟他年教復臨	○○●○○○○	○○●○○(C)

本詩の詩型は七言律詩で、深(式針切)、臨(犁沉切)が下平十二侵で押韻しているが、逢(符容切)、容(餘封切)が上平二冬の韻字で、人(而鄰切)が上平十一真に属している。そのため、本詩は押韻し

ていない「失韻」の作である。押韻以外に、第5句は失粘の錯誤を犯しており、第1、6もそれぞれ平仄上の錯誤がある。ただし、本詩の頷聯と頸聯はある程度対句になっているため、馬成驥の詩より作詩の水準が高いと思われる。しかしながら平仄上の錯誤が過多である本詩も、近体詩としては失格である。

李睟光は、『琉球使臣贈答録』のあとがきにおいて、

「而堅等短於屬文、不足與唱和耳」

と記しているが、これは蔡堅らの漢詩を読んで、その作詩能力の不足を察知したためではないだろうか。

久米村における作詩水準の上昇は、明清交代後、清朝が中国全土の統一的支配を確立したのちにはじまったと考えられる。

久米村は、「進貢を軸に編成された特別な官人組織であった」と言われている。それを久米村の教育内容と照らし合わせてみると、「久米村の子弟に要求された知識が、実用的なものが中心になった」ということが分かる。

久米村における漢詩創作の発展が、清代になってからようやく始まった理由として、明代と清代との科挙制度において、漢詩の地位が極めて上昇したことが挙げられるのではないだろうか。無論、久米村出身者は、中国の科挙に参加できない。ところが、彼らの交渉相手である中国の知識人はそのほとんどが、科挙出身者や科挙志望者と言っても過言ではないのである。そして、立身出世の階梯とも呼ばれる科挙試験は、その時代の知識人の関心、並びに文学の発展に強い影響を与えていると考えられている。⁽²⁾

例えば、乾隆年間に刊行された科挙試験のための受験参考書である『應試唐詩類釋』の序文で、清代の知識人である葉之榮は、明代

の科挙制度が八股文に偏重していたため、文人階層の漢詩創作の意欲は実質上に抑制されていたと指摘している。

「自勝国八股之制定、操觚者皆以詩為有妨舉業、概置不講。雖海内之大、不乏好學深思、心知其義、而窮鄉僻壤且有不知古風歌行、近體絕句、為何物者。風氣至此、亦詩運之一厄也」

また、李元復が『常談叢錄』で、乾隆年間に初めて、郷試で律詩の試験を実施するとき、漢詩の知識を全く学習したことがない受験者たちの慌ただしい姿を以下のように記録している。

「乾隆二十四年己卯科、始於鄉闈試以排律五言八韻詩。令初下、士多未習詩者。是科江西鄉試詩題為『賦得秋水長天一色』、得天字。有士人全不解所謂、遍詢諸同號舍者、或告以此限韻、當押之。遂於十六句作置韻、盡押天字、其可笑有如此者。自是歲、科試生童於文後亦用排律詩。然每苦其難、尤不識四聲平仄、雖極力揣摩、卒未能通。有先以別紙創定格式、然後逐字循格填寫、起草猶時從聯坐者頻頻絮問不休、令人增厭。有別構文一篇、願與他人互易一詩者。又有日中而文已騰正、搖體顰眉、吟聲哀苦、律成而日已暮、倉促完卷者。至其詩句之俚拙可哂、又不待言也」。

そこから明らかのように、清代になって漢詩の重要性が高まる以前、常に漢学知識の実用性を意識しながら教育を展開していた久米士にとって、漢詩の実用価値はそれほど高くなかったと考えられる。

一六七八年、康熙帝が博学宏辞科を開いて、試験に「省耕詩五言排律二十韻」を出題し、初めて律詩の題が科挙に出された。程順則が勤学人として福州に赴いたのは一六八三年、おそらくそのとき、彼はすでに科挙の傾向に敏感な中国知識人から、先述したような情報聞きつけたのだろう。

一六八三年、程順則が勤学人として福州に四年間滞在していた時、当地の碩儒・陳元輔について漢詩を学んだ。数年後、再び中国に赴く程順則が瓊河で、勤学人時代に用いた陳元輔著の漢詩の基礎教科書である『枕山樓課兒詩話』を陳から受け取り、帰国後にそれを上梓した。陳元輔がこの本で、作詩に対する自分の心得を述べた上で論の俎上に載せるのは、漢詩と科挙の関連性についてである。

「一首律詩、只起承轉四字盡之而已……吾於帖括中亦得是意、誰謂作詩有妨舉業哉」

陳元輔は、順治年間に生まれた儒者である。彼が自分の著作で作詩は科挙の妨げとなるものではないと、弁解している様子から明白なように、少なくとも康熙初期の時代にも、明代から伝わってきた「詩は科挙の妨げとなるもの」という認識は、中国の知識人の中に一定の影響力を持っていただろう。

しかし、こうした作詩に対する認識は、康熙帝が博学宏辞科を開いて、漢詩が科挙試験に登場してから大いに変貌した。素爾訥等が編纂した『欽定学政全書』にも、科挙試験の重要性について、「如詩不佳者、歲試不准拔取優等、科試不准錄送科舉」と記している。

また、科挙の受験者のみならず、進士になった合格者たちにも、律詩の試験が課されている。それについて、程含章が『教士習』に以下のように書いている。

「国朝取士、八股以外、最重律詩。迨登第後、月課、散館、大考、則置八股不用、唯試詩賦。一字未調、一韻未葉、即罷斥不用」
こうして、漢詩の中国文壇における重要性が極めて上昇した。さらに、清代の科挙試詩は、詩の形式的な側面、つまり平仄の正

確性に関する要求が極めて高かった。錢載は『廣西鄉試告示』にて、受験者に対して以下のように説諭している。

「詩體以和平莊雅為擅場、其用俚俗不典及一切蕭颯字句者、斷難合格；且詞義必須層次貼切、不宜混浮。平仄務須諧協、母致

失黏。對仗即不甚精工、而字義之虛實、單雙、在所必辨。韻雖別刊一紙隨題分給、而檢點仍須細心、母致出韻」

『枕山樓課児詩話』の初頭に、程順則の恩師である陳元輔も、平仄の重要性を以下のように強調している。

「學詩要先知平仄、此二字不辨、匪獨聲音不協、抑且規式有乖」

こうした風潮の中に、通事として外交の最前線に立つ久米士たちの中で、中国の官僚と知識人に学職を認められ、外交行動を円滑に推進するために、単なる意思疎通や感慨を表わすものではなく、平仄や押韻などの要求を満たした形式美のある漢詩を作ることの重要性が一層高まったと考えられる。

程順則をはじめ、十七世紀中葉に生まれ『中山詩文集』に名を遺した知識人の多くは、勤学人として留学した経験があるが、いずれにせよ典型的な久米村式漢学教育を受けていたとは言い難いと思われる。

しかし、程順則は帰国した後、琉球最初の漢詩集を刊行して、明倫堂をはじめとする教育機関の設立を提案し、琉球の漢学教育を振興させた。その理由は、彼が久米村の再興に向かい、上述のような清朝における文化的な動向に気づき、従来必ずしも重視されていなかった漢詩を「実用的な知識」の枠組みに入れた、ということがあつたのではないだろうか。また、平仄式の検証によって明らかになつたように、程順則をはじめとするこの時期の久米詩人たちの作品

は、ほとんど近体詩の規則に則つて作詩されているが、平仄上のミスが多少存在している。このような現象も、草創期にある久米村漢詩の特徴をある程度示しているのではないだろうか。

おわりに

本稿では琉球王国最初の漢詩文集である『中山詩文集』に収録された琉球漢詩を網羅し、平仄式の分析を行い、さらに明代に当たつた時代からの状況を踏まえた上で、漢詩が久米士族の「実用的な知識」の枠組みに入れられた経緯を考察した。

漢詩の贈答と唱和は、近世の東アジアにおける各国の境界線を越えて、外交の舞台で頻繁に行われ、「政治的な差別と対立を越えた直接で人間的な交流と連帯をつくりあげる」という役割を十分に果たした。『中山詩文集』は、琉球王国最初の漢詩文集として一七二五年に初版刊行された後、久米士族のみならず、首里士族の中にも、楊文鳳父子のような作詩に長ける人材が輩出され、琉球漢詩文は隆盛期を迎えた。その後、冊封使が渡来する琉球本国だけではなく、使節として赴く中国や日本においても、漢詩の唱和が盛んに行われていた。

しかし、琉球において漢詩は、十四世紀末にすでに日本からの渡琉僧や中国からの「閩人三十六姓」によつて伝播したものの、中世から漢詩を外交の場に用い始めた日本や朝鮮と比べると、本稿で解明したように、琉球王国における漢詩創作は、首里と久米村という二つの学統の下で同時並行的に展開されていたわけではなく、明代に当たる時代の作詩はほぼ琉球の僧侶集団に限定されており、外交に用いられていなかった。それに加えその時期の琉球漢詩はまだ比

較的低い水準に留まっていた。

琉球における漢詩に対する本格的な受容は、十七世紀末から漢詩の実用価値が程順則ら久米士に認められたのちに始まったと考えられる。本稿では、こうした局面を形成させた要因があることを示した。

①琉球が中国と外交関係を結び始めた明朝から清朝初年までの、東アジア各地域間における流行詩風の差異。

②中国文壇における漢詩の重要度の増減がもたらした、漢詩の外交行動における実用価値の上昇。

③外交専門人材である久米士族の実用知識に対する重視。

以上、三点の要因が作用し合った結果であると結論付けたい。

注

- (1) 松尾善弘氏「近体詩の平仄式と構句法」(『アジアの歴史と文化』第四号、二〇〇〇年)「漱石の漢詩・平仄式の検証」(『アジアの歴史と文化』第二二号、二〇〇八年)「西郷南洲翁の漢詩——平仄式による検証と解釈」(『山口大学文学会志』五九卷、二〇〇九年)。
古川末喜氏「五言律詩の平仄式、及び拗句について——教学上の観点から」(『中国文学論集』第二二号、一九九二年)などがある。
- (2) 前掲松尾氏論文のほか、王力『漢語詩律学』(中華書局、二〇一五年)、簡明勇『律詩研究』(五州出版社、一九七三年)、飯田利行『漢詩入門韻引辞典』(柏美術出版、一九九一年)などの著書に使用されたそれぞれの説明の仕方が挙げられる。
- (3) 中国宋代に平水(山西省)の人劉淵がまとめた韻分類。唐韻な

ど切韻系韻書の二〇六韻を整理して一〇七韻とした。元代に一〇六韻となり、現行の「佩文韻府」などはこれよってしている。(『大辞林 第三版』三省堂、二〇〇六年)。

(4) 「二三五不論、二四六分明」(詩句の一、三、五字目の平仄型が基本平仄型の規定に拘らず自由に変換できる、二、四、六字目の平仄型が基本平仄型に従わなければならない)という通俗的な口訣があるが、必ずしもすべての場合に適用されるとは限らない。例えば、「●●○○●●◎」には、三字目の平仄型を変えると、四字目が孤平になってしまうため、自由に変換することができない。

(5) 上里賢一「中山詩文集」の成立」『琉球漢詩選』(九州大学出版会、一九九八年)。

(6) 上里賢一『琉球漢詩選』(おきなわ文庫、二〇一八年)。

(7) 虎の毛皮。『左傳・莊公十年』…「自雩門竊出、蒙皐比而先犯之。」杜預注…「皐比、虎皮。」孔穎達疏…「樂記」云…「倒載干戈、包之以虎皮、名之曰建囊。鄭玄以為兵甲之衣曰囊。囊、韜也。而其字或作建皐。」

(8) 上里賢一『琉球漢詩選』(九州大学出版会、一九九八年)。

(9) 前掲上里著書。

(10) 上里賢一「琉球漢学の始まりと僧門の役割」『琉球漢詩選』(九州大学出版会、一九九八年)。

(11) 前掲上里論文。

(12) 原田禹雄「夏子陽 使琉球録」(榕樹書林、二〇〇一年)。

(13) 陳侃『使琉球録』…「至于作詩、則弄文墨、參禪乘者間亦能之、而未必唐體之效矣」。郭汝霖『重編使琉球録』…「至于作詩、則

弄文墨、參禪乘者間亦能之、而未必唐體之效矣。蕭崇業『使琉球録』…「至於作詩、暫落落辰星、僅知弄文墨、曉聲律爾矣。而許以『效唐體』、吾誠不知其可也」。

(14) 日野竜夫『徂株学派——儒学から文学へ』（筑摩書房、一九七五年）。

(15) 森銑三、北川博邦論『銃日本隨筆大成・第四冊』（吉川弘文館、一九七九年）。

(16) 燕行録叢刊増補版データベース、KRpia Korean Database、www.krpia.co.kr

(17) 球陽研究会編『球陽』（角川書店、一九七四年）。

(18) 喜舎場一隆『琉球における唐通事』『近世薩琉関係史の研究』（国書刊行会、一九九九年）。

(19) 『續叢書類従・第十三韓上』（續群書類従完成會、一九二五年）。

(20) 田名真之『近世久米村の成立と展開』『新琉球史・近世編（上）』（琉球新報社、一九九九年）。

(21) 上里賢一『琉球漢学と「閩人三十六姓」』『琉球漢詩選』（九州大学出版会、一九九八年）。

(22) 蔣寅『科舉試詩對清代詩學的影響』（『中国社会科学』、二〇一四年第十号）に参照。

(23) ハーバード燕京研究所蔵臧岳編『應試唐詩類釋』乾隆三十九年刊本、Harvard-Yenching Library Chinese Rare Books Digitization Project Collected Works、<https://holi.harvard.edu/>

(24) 李元復『常談叢録』『晚清四部叢刊』（文聽閣圖書、二〇一一年）。

(25) 『和刻本漢籍隨筆集・第二十集』（汲古書院、一九七八年）。

(26) 素尔訥等纂修『欽定学政全書校注』（武漢大学出版社、二〇〇

九年）。

(27) 程含章『程月川先生遺集十五卷』『叢書集成統編』（上海書店、一九九四年）。

(28) 錢載『穉石齋詩集・穉石齋文集』（上海古籍出版社、二〇二二年）。

(29) 石母田正『詩と蕃客』『日本古代国家論・第一部』（岩波書店、一九七三年）。